

—FORUM—

“返還”でどう変わる 香港の観光事情

(株)JTBワールド 取締役アジア部長

鈴木 勝

日本人の海外旅行者の約14%が訪れる人気観光地・香港に、中国への返還という歴史的なイベントが迫ってきた。96年は返還人気で爆発的な旅行ブームを呼んだが、97年に入ってややブームに陰りが見られるようになってきた。

返還後の先行き不安・不透明感を指摘する旅行関係者も少なくない。

返還で香港の観光事情はどう変わらるのか。香港の魅力は保たれるのだろうか。旅行業者の立場から探ってみた。



PROFILE

鈴木 勝 (すずき まさる)

1945年千葉県生まれ。67年早稲田大学商学部卒、JTB(日本交通公社)に入社。主に海外・国際業務に従事、81年からJTBシドニーチーク支店長としてオーストラリアに駐在(5年間)。89年からJTB北京事務所長として中国に駐在(4年間)、帰国後現職に就く。「コアラの国の法律あれこれ」(早稲田経営出版)、「中国にうまく滞在する法」(日中出版)、「"中國的社交術"指南」(中央公論・論文)、「カラオケ行脚による中国都市ガイド」(同)、「中国人どうまくつきあう法」(日中出版・近刊)などの著書がある。

はじめに

香港から 大型トラベル・ミッションが やってきた!

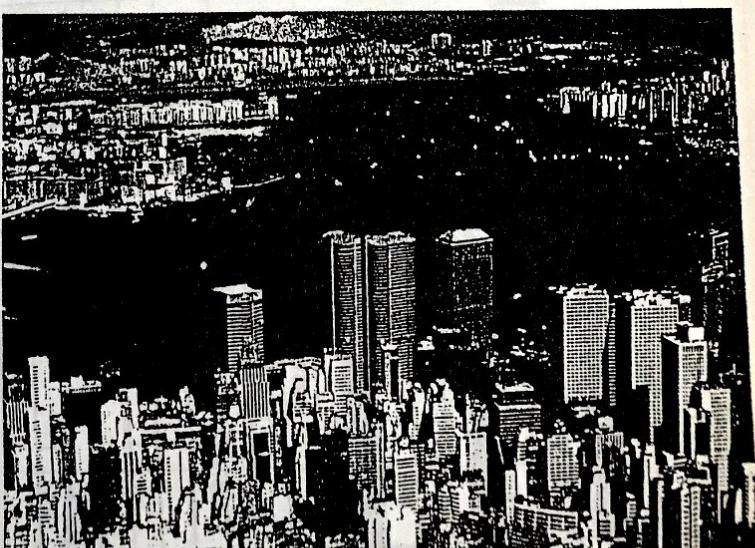
中国への返還を2か月余に控えた1997年4月初め。香港観光協会(HKTA)理事長エミー・チャン女史をリーダーにして、香港の主要なホテルの総支配人や観光関係者のトップが日本から北へ駆け回った。

「7月1日に主権が英国から中国に返還されても、香港は変わらない」と、日本の各地で返還後の観光事情を精力的に説明する一方、いかに安全かを説くために、わざわざ「ロイヤル香港ポリス」を引き連れてのお出ましとなつた。われわれ旅行会社にとって、観光協会の理事長の来日以上の驚きは、ホテルのトップメンバーが大挙してやって来たことだ。つい最近まで世界中のホテルのなかでそのトップに会うことが一番難しい所といえば、例えば、仕入れや値段交渉の際に、「それは香港さ!」と

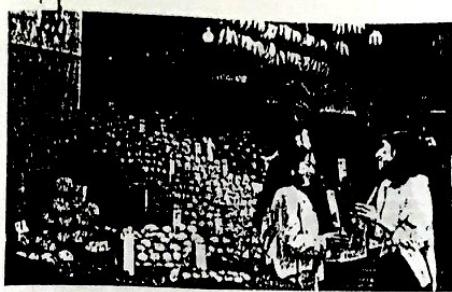
までいわれていた。そのメンバーがこれほど多くミッションでやってきたのは初めて。

裏を返せば、それほど返還は香港観光産業にとっても、大転換期を意味している証明でもある。たしかに、2年ほど続いてきた猛烈な“香港観光ブーム”も、返還の年を迎えた今年の1、2月からやや減速し始めた。

実際、香港を訪れた日本人旅行者は95年(通年)は約169万人で前年比17.4%増、96年(同)は約238万人で40.9%増と著しい伸びを見せてきた。しかし今年に入ってからは1月こそ前年同月比10.5%増の伸びを見せたものの、2月は8.6%、3月は2.5%の減少となった。これまで95年5月から続いていた“前年同月実績オーバー”的記録は22か月目でストップしたことになる。(資料1、2参照)



▲英國領・香港から中国領・香港へ

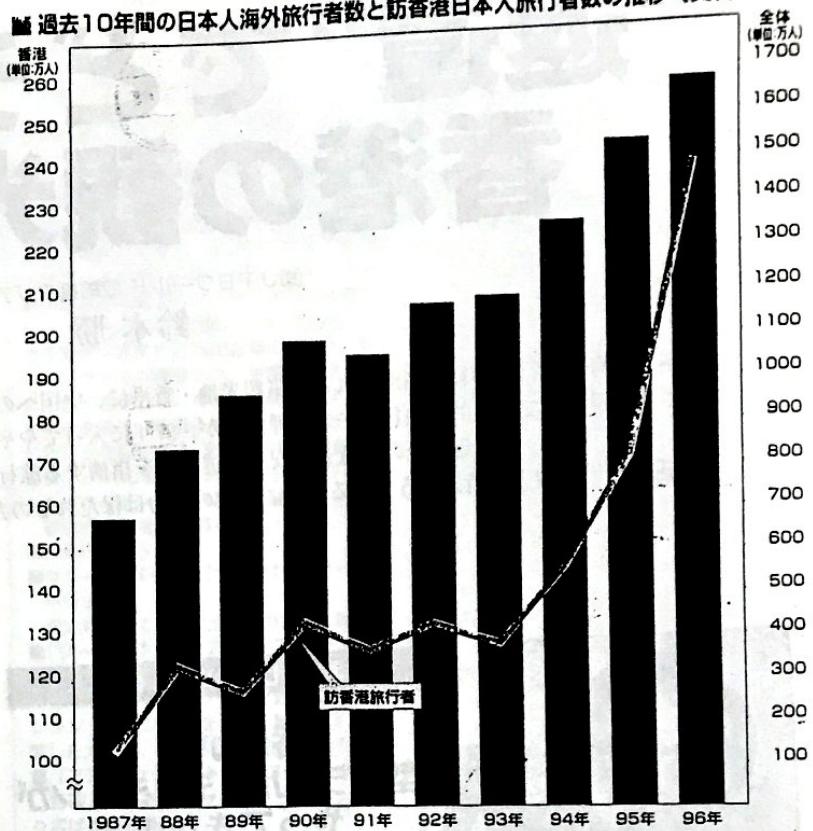


▲“返還”を前にして伸び悩んでいる香港ツアー

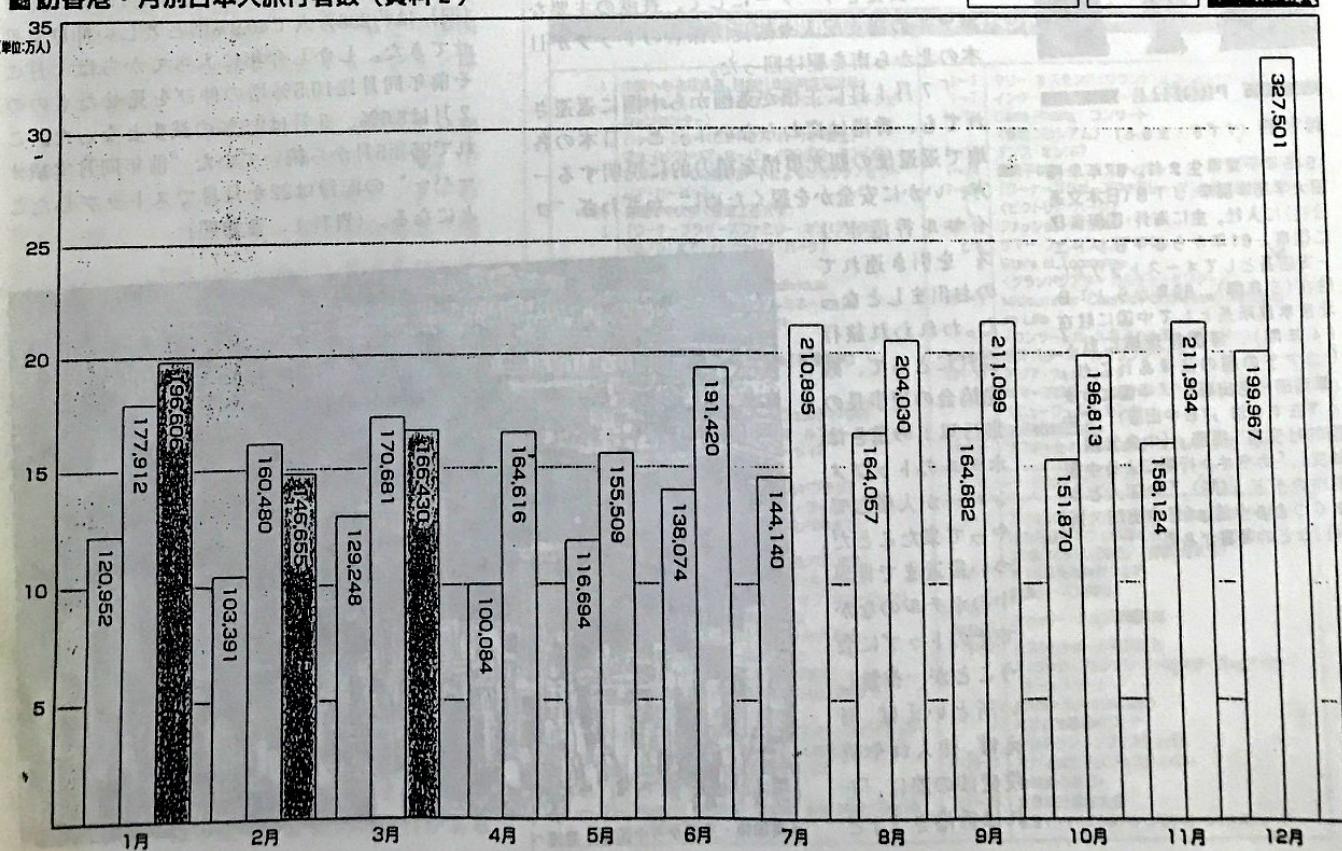
加えて、返還後の観光客の出足が悪いとの“噂”が出来てきたからだ。こんな情勢の中、香港観光の推進役のトップメンバー達が直接、旅行業者やマーケットに触れるためにやってきた。また、こんな風聞を吹き飛ばすために、「トキメキ100日間キャンペーン」を返還直後からスタートさせよう…と、その“お披露目”の目的も兼ねていた。

同時に近隣諸国、いわゆる観光産業の“コンペティター”（この1、2年ほど、香港の一人勝ちでやや伸び悩んでいるシンガポールや韓国など）の復活を許さまいとする作戦とも見受けられた。とにかく、このような状況の中、世界中から注視の的ともいえる時期に、“魅惑の香港”をアピールし、最高の作戦を仕掛けたのである。

■過去10年間の日本人海外旅行者数と訪香港日本人旅行者数の推移（資料1）



■訪香港・月別日本人旅行者数（資料2）



1. 成長し続けてきた 観光立国「英國領・香港」

「急ごう!香港」、このキャッチフレーズの効果があり過ぎたかも知れない。

返還前の香港を一日見に行こうとする人が急増した。もともと、香港はリビーターが多いところだが、HKTVAの調べでは、この国へのリビーターは47%と多く、これに加えて初めての旅行者が増えたことからこんな数字になった。うなぎ登りになった数字は資料1、2のとおり。

なぜ、こんなに爆発的ブームを巻き起こしたのだろうか。潮れば、スタートは95年の阪神大震災の影響が一段落した頃、すなわち95年春。そして、その勢いを増したのは返還まで1年を切った頃だ。96年6、7月にかけての新聞・テレビ・雑誌で「香港特集」が組まれ、さらに熱気を煽った。女性誌、グルメ誌、情報誌にまで登場、果ては書店店頭には「香港コーナー」まで登場する加熱ぶり。

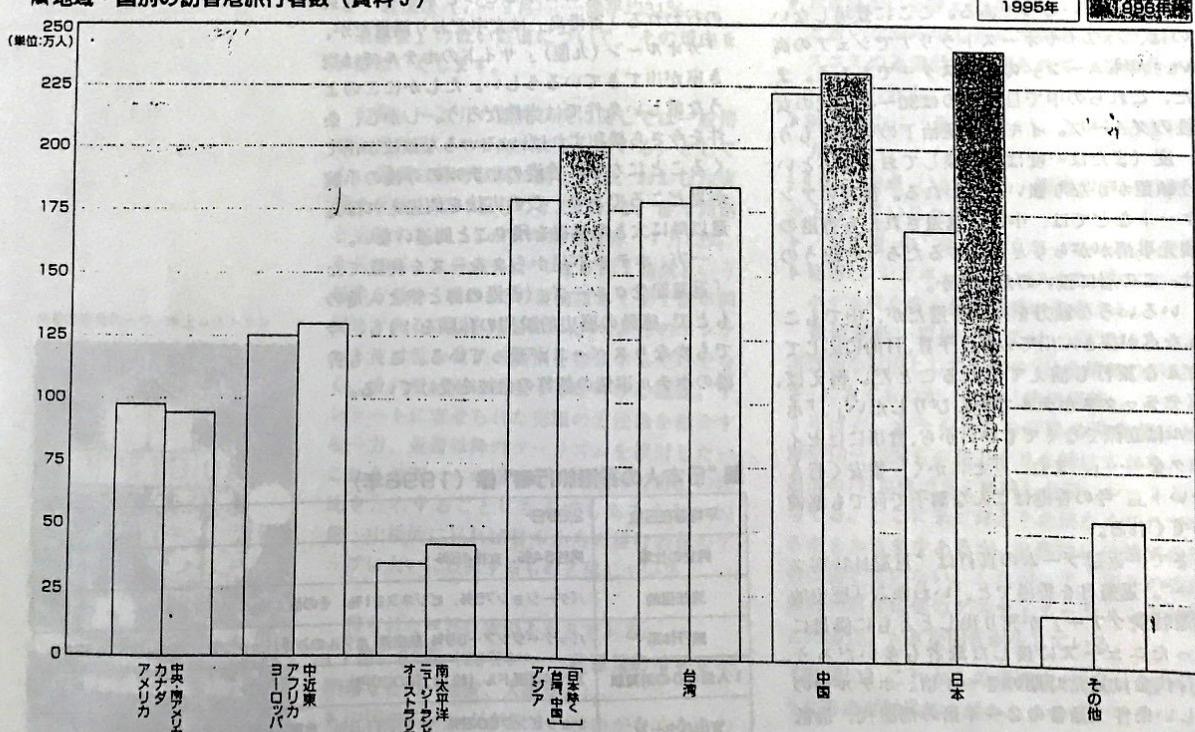
最大の盛り上がりは96年の12月。クリスマス時期から年末にかけてはもちろん、例年なら

ガラガラ状況の上旬と中旬にも3か月ほど前からの申込みも多く、出発日によってはホテルが確保できず、「満員御礼」の通知を出すケースもあったほど。これは返還の前年に行つておこうという旅行者心理が大きく作用したものだろう。結局、こんな心理状態が作用し、12月は前年同月比63.8%増という驚異的な伸び率を記録した。

返還前にぜひ一度は行きたいという“駆け込み需要層”で96年の香港観光は大記録を樹立。年間の日本人旅行者数は前述のとおり238万人(前年比40.9%増)になり、昨年まで最も日本人旅行者の多かったハワイを追い抜き1位(ハワイは213万人／推定)に浮上した。

ところで、世界中からの香港への旅行者はどのような動きを見せてているだろうか。日本人マーケットのみならず、欧米やアジア地域の動きも活発になっている。世界全体としては95年は1020万人、96年は1170万人で、それぞれ前年比9.3%増、14.7%増の高い伸びを示した。特に顕著な伸びを見せた国はイギリスで、96年は前年のマイナスから一転して10.1%増の39万人を記録、“宗主国”として最後ともいえる活発な動きを示した。また隣りの韓国は95年25.0%増、96年12.3%増と、日本並みの勢いをみせた。

■ 地域・国別の訪香港旅行者数(資料3)



人數ベースでは95年は1位中国（224万人）、2位台湾（176万人）であったが、96年は日本が両地を抜いて一気にトップに立つ結果となった。（資料3参照）

旅行目的地としての香港の大きな伸びを検証する方法として、ホテルの稼働率があるが、96年は香港全体で平均88%を記録した。全世界の平均を約65%とみればはるかに高い水準をキープしていることになる。しかも、96年10月以降は10月93%、11月92%、12月93%となっており、ほぼ満室であったことがうかがえる。（資料4参照）

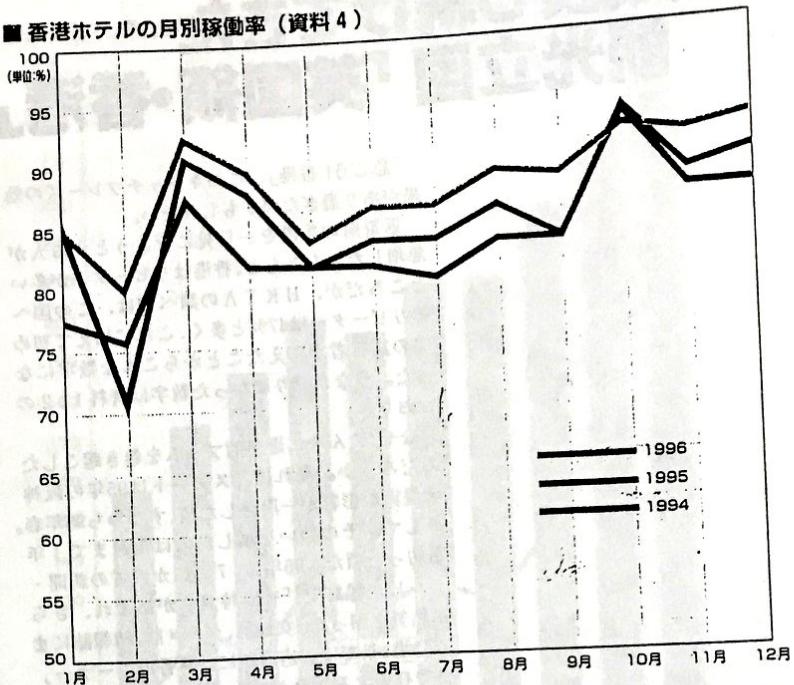
ところで、どんなに新聞・テレビ・雑誌で宣伝されたにしろ、素材そのものに魅力がないければブームは長続きはない。どんな魅力が香港にあるかといえば、①ショッピング（特にブランドもの）、②グルメ…中華料理、③エステティック、④夜景・夜の繁華街、⑤手軽なフライト時間など、とにかくいろいろな観光素材を挙げることができるが、何でも気軽にエンジョイできることがその秘密なのだろう。ただ、香港の魅力の1、2位を争うショッピングは最近の円安の影響もあり、その順位から徐々に下ろされている。

さて、香港は多様なマーケットを魅了するデスティネーション（目的地）としても売れている。「リビーター」「ビギナー」「OL」「グループ」「熟年」「ファミリー」「社員旅行」など、香港への日本人観光客の層はあらゆる分野にまたがっているのである。ここに登場しないのは、ハワイやオーストラリアでシェアの高い「ハネムーン」のクラスターであろう。また、これらの中で目立つのは30~40歳代の女性のグループ。イギリス統治下の香港をもう一度（または一度は）体験しておきたいという願望がかなり強いと思われる。後述のアンケートなどでは、中国に返還されたら香港の観光事情ががらりと変化するだろうと思うのは、この層に強いのだろうか。

いろいろな魅力を持つ香港だが、中でもこんな点が抜きん出ている。予算、目的に応じてどんな旅行も揃えてくれることだ。例えば、「デラックスホテルでのんびりしたい」、「ホテルは立派でなくともいいから、食事にはゼイタクを……」、また、「とにかく一番安く行きたい！」。今の香港はこんな調子で何でも準備してくれる。

さて、返還ブームの真打は“返還日特別ツア”。返還日を香港でと、いわゆる「歴史的返還特別ツア」が売り出しとともに満員になったニュースに接した読者も多いだろう。旅行代金は通常時期の2~4倍。ホテル側の厳しい条件（通常の2~4倍の部屋代、最低宿泊基準5、6泊、事前支払い主義など）の結

■香港ホテルの月別稼働率（資料4）



果、こんな金額になる。この手法は“香港人商法”的典型なのかもしれない。

「超満員」という状況も、返還期日を直前にして変化が出てきている。香港のホテル関係者などの話を総合すると、どうやら、式典の行われる「香港島」は文字どおり満員だが、「カオルーン（九龍）」サイドのホテルでは空き室が出てきているらしい。たしかにこのような厳しい条件では当然だろう。しかし、条件を今さら緩和すれば、いろいろな波紋が出てくることになる。香港のホテルの今後の手腕が見どころであり、この方法を間違えれば返還以降に大きな禍根を残すこと間違いない。

一方、ホテル不足からクルーズを仕立てた「返還記念クルーズ」（香港の海と空と大地のもとで、感動の歴史的瞬間の体験を！）も、今でもかなりスペースが残っている。これも香港のホテル事情の誤算の余波を受けている。

■“日本人の香港旅行者”像（1996年）

平均滞在日数	2.89日
男女の比率	男性54%、女性46%
滞在目的	パーセーション75%、ビジネス21%、その他4%
旅行体系	パッケージツアーフ59%、航空券・ホテルのみのパックツアーフ12%、自由旅行29%
1人当たりの消費額	7764香港ドル（約11万6000円）
支出パターン	ショッピング50.9%、ホテル31.8%、食事8.5%、ツアーフ4.8%、エンターテインメント1.7%、その他2.3%

2.香港ブームは続くか？ 観光立国「中国領・香港」

返還以降の動向数値としては、残念ながら IKT A といえども感触の城を脱していない。抽象的に述べてもなかなか説得力がない。したがって、返還後の動向を占う一つのデータとして具体例を出したい。

つい最近、香港返還後の観光に関して、弊社パッケージツアー「ルック JTB」としてアンケートを実施、広く意見を求めるために JTB 各支店のほか社外一般のリテラーなど、116 店舗から多くの回答を得ることができた（1 店舗から複数の回答を受ける方式を探用）。したがって、マーケットにかなり合致した結果だと思っている。アンケートは以下のようない形で実施した。

【お問い合わせ】皆様、ご存じのように97年6月30日をもって、香港は中国に返還されます。この期を境にいたしまして、日本人の香港旅行の販売状況に大きな変化が見られます。ルック JTB 「香港」の集客人数も同じ傾向を示しております。（97年4月11日現在）

- 1) 返還前（4～6月末）……同年同期比平均 156%
 - 2) 返還後（7～9月）……同平均31%
- 「返還後」の低い数値について、その理由をお尋ねいたします。

97年4～6月の販売状況に関しては一般情勢と異なる（やや高率になっている）としても、返還以降の状況に関しては、おおむね実態を反映しているものと思われる。前年同期と比較すると、3ヶ月平均で31%（7月40%、8月28%、9月15%）、つまり約7割減という異常な低さ（なお、この数値はあくまで前年同期比であることを銘記願いたい）。このアンケートでは低い数値の要因を探求するだけでなく、それをいかに克服するかが中心課題。アンケートに寄せられた克服の方法論を紹介する一方、返還以降のツーリズムを検討したい。これらの問い合わせへの回答が「今後の香港」の浮沈を左右することになるであろうし、短期・中期的に見れば日本からの旅行者数のアップに大いに貢献するものと信じている。

得られた回答は次のとおりである。

- 【1位】81点（26%）……返還後の情勢が不明確なため（治安、入国など）。
- ▶中国のイメージが強く、自由がなくなるのではないかという危惧がある。

▶政情不安が一番大きく（特に中年女性）最近1、2ヶ月は様子を見ないとわからない。

▶返還後の問い合わせも多いが、しばらく様子を見てから検討したい、というお客様も多い。

▶ビザの関係やショッピングなどに影響があるのかどうか、確実な情報がない。

▶実際がどうであれ、英國領から中国になるというイメージダウン。

このアンケートでわかるように、「社会情勢の不透明さ」がトップになっている。「治安」「ビザ」「ショッピング情報」など、旅をセールスしている旅行社側でさえも、かなり情報不足を感じている。現在、新聞・テレビなどのメディアがいろいろな情報を流し、政府が「50年間は変わらない」と何度も発表しようとも、報道のアングル次第では反対に不安感は募るものらしい。治安や香港ドルに発した心配は、観光、ショッピングなどに自山がなくなってしまうのではないか、またはグルメ天国が消失してしまうのではないかとの不安感に結び付けている。

【2位】57点（18%）……昨年までの数値が異常なため。

▶「返還前に行こう」というキャッチコピーやコースが多かった。

▶一時期の盛り上がりは異常だった。

【3位】50点（16%）……香港へは返還前に行ったので、当分行かなくても良い。

▶お客様が口を揃えたように、「返還前に……」と言いながら申し込んでいることから、マスコミの返還特集に煽られている傾向が強いと思われる。

▶96年度中に「最後に……」と申し込まれた方が多い。

【4位】48点（15%）……香港ツアーの代金が上昇しているため。

▶「安近短」の「安」がなくなっている。

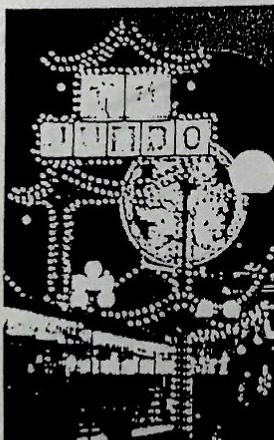
▶他国（シンガポール、バンコクなど）に比べて、ホテル代を含め地上経費が高過ぎる。

数値が低い原因としては4位ではあるが、実質的な原因として1位の「社会情勢の不透明さ」に次ぐものが、この「価格高騰」。ここ2、3年ほど、ホテル料金の高騰は異常なほど。毎年10～15%もの値上がりを続けており、返還後の7月以降でさえ継続した高いレートとなっている。ここに来て修正を余儀なくされているホテルも多少あるが、全体的には強気の姿勢は崩していない。したがって、現在の香港旅行の料金は他のデスティネーションと比較した場合、大きな開きが生じている。

【お問い合わせ】これから増売策として、どのような方法が効果的と思われますか？

【1位】73点（38%）……販売代金を下げる。

▼香港名物の一つ、水上レストラン



▶代金が高いというお客様の声が多いので、代金を控えることが一番増売につながると思う。

【2位】49点(25%) ……宣伝・販売促進(その方法として……)

▶「返還後、香港は！」というネーミングで。

▶パンフレット・ポスターで返還後の香港を明確にし、不安をなくす。

▶返還後の治安・物価・ショッピングなどの状況を明確にする。

▶返還後の新しい魅力と、変化しない魅力をアピールする。

▶「値段が下がった！」「新しい香港を見よう！」というネーミングで。

▶返還後しばらくは、新年を中心に「今までとは違う香港」として販売強化する。

▶「返還後の香港」ということで売り出すしかないが、変化がなければ難しい。中国との組み合わせも一つの案。

▶ツアーフレームが高くなり、ショッピングを前面に打ち出すほどブランド物が安く揃っているわけではないので、他の魅力を見いださないかと売れないと思う。

▶「おいしいものが食べられる、安くショッピングができる、魅力的なホテルとエステ」。この4点が今ま変わらなければ、売れていくと思う。

▶今現在の情報では、返還後に香港がどうなるのかわからないので、何ともいえない。

このアンケートの中には「新生・中国香港」の観光促進のために、多くのヒントが含まれていると思う。香港では観光産業が近い将来ナンバー・ワンになるかもしれないといわれている。なぜなら、'96年の統計によれば、外貨獲得産業のベスト3は、①アパレル・紡織、②観光、③機械・部品、となっている。ちなみに観光産業による外貨収益は同年845億香港ドル（前年比12.8%増）であり、日本からの観光だけをみてても185億ドル（同31.1%増）にも達している。しかも、1位のアパレル産業が人件費の高騰に苦しみ、生産拠点を中国本土に移転しつつある現況からみると、観光産業が1位にランクされるのは、順調に行けば、それほど遠い話ではない。

観光が新生・香港の基幹産業になるための「課題」

それでは、観光が基幹産業となるための課題を探ってみよう。まずは「香港の中国化」現象。これにはさまざまな要素が含まれることになる。観光産業に関連するキーワードを

“返還”後の香港、どこが変わる？ 変わらない？

7月1日を境に香港は「一国二制度」というユニークな政治体制の下、中国の「特別行政区」となる。いったいどこが変わる？ 旅行者にとって興味のある疑問について、香港観光協会などの発表を基に答えてみよう。

する。

Q：中国との国境はなくなる？

A：国境は引き続き境界として存続し、中國本土から香港への中国人の人口流入を管理する。

Q：資本主義制度は維持される？

A：香港特別行政区基本法によれば、今後50年間は資本主義と生活様式は保持される。

Q：法律は変わる？

A：英國の慣習法に基づいた現存の法制および司法制度が維持される。司法機関は香港の最高裁判所を最高機関として独立を維持する。

Q：ギャンブルは禁止？

A：公営競馬や宝くじはそのまま公認され、存続する。競馬ファンはひと安心。

Q：自動車は中国と同じ右側通行となる？

A：左側通行のまま。また、現在は禁止となっている左ハンドルの自動車が認められる予定。

Q：エリザベス女王の肖像入り切手は使えるのか？

A：6月末までは使用可能。その後香港島の眺望をデザインした切手が新たに登場する。

Q：香港ベースの航空会社、キャセイパシフィック航空(CX)はどうなる？

A：中国国際信託投資会社(中国)がCXの25%の所有権を獲得、CX&スワイヤバシフィックは過半数(52.6%)あったCXの所有権を43.9%に減らすこと合意している。運航面での変化はない。

(編集部)

ピックアップしてみた。

(1) 治安 ……最近のヤングレディはフリータイムのとき何にでもチャレンジする。ショッピング、グルメ、散策、エステなどと。しかし、治安面が心配で、剃刀で面白さがなくなるとなれば、“香港への潮”は直ちに引いてしまう。また、ファミリー旅行が拡大しているトレンドの昨今では、さらに「安心感」が大事となる。

(2) 英語 vs 中国語(普通語) ……レストランやタクシーなどで、最近、英語が通じなくなったという話題が増えている。大陸からの中国人が職に就くケースが増加してきたからである。観光立国「中国領・香港」としては、英語教育は必須の条件。たしかに、基本法では「中国語以外に、英語も使用できる」と謳われているが、最近の香港人の普通語(北京語)勉強熱は大変なもの。これからは中国語(広

FORUM "返還"でどう変わる香港の観光事情

東語、普通語)、そして英語の交錯した香港が誕生することになる。しかし、大陸の中国人と同様、香港での英語教育は欠かせない。

(3) 中国式マニュアル ……いわゆる人治主義。中国人のように“関係”(グアンシー)でビジネスをすること自体、決して悪いことではないが、悪い習慣が拡大すれば効率的な仕事の妨げとなる。現在の香港人の柔軟的でスピーディーな仕事ぶりや徹底したサービスの継続を切望したい。

(4) 香港ドル vs 人民元 ……従来、中国の「人民元」は香港では一般に使用もできず、また両替も不可能であったが、最近では大変化をみせている。香港の街の通りのあちこちにある両替商や銀行の店頭には、あざやかな中国国旗「五星红旗」のマークと「人民元・歓迎」の文字。香港に大量の人民元が流れているのである。この面では不安もあるが、香港ドルも負けてはいない。隣の広東や深圳で大いに使われている。今では発行された香港ドルの30%とか、40%が中国に行っているという。U.S.ドルに裏打ちされた香港ドルの流通範囲が拡大されて、ゆるぎない安定感の保持を望みたい。

香港の観光がナンバーワン産業になるため

には前述のような不安材料が気掛かりである。しかし、これらを“新しい香港”がうまく乗り越えられれば、現在の香港ブームは一時的には下がっても必ず復活し、基幹産業となれるはずである。

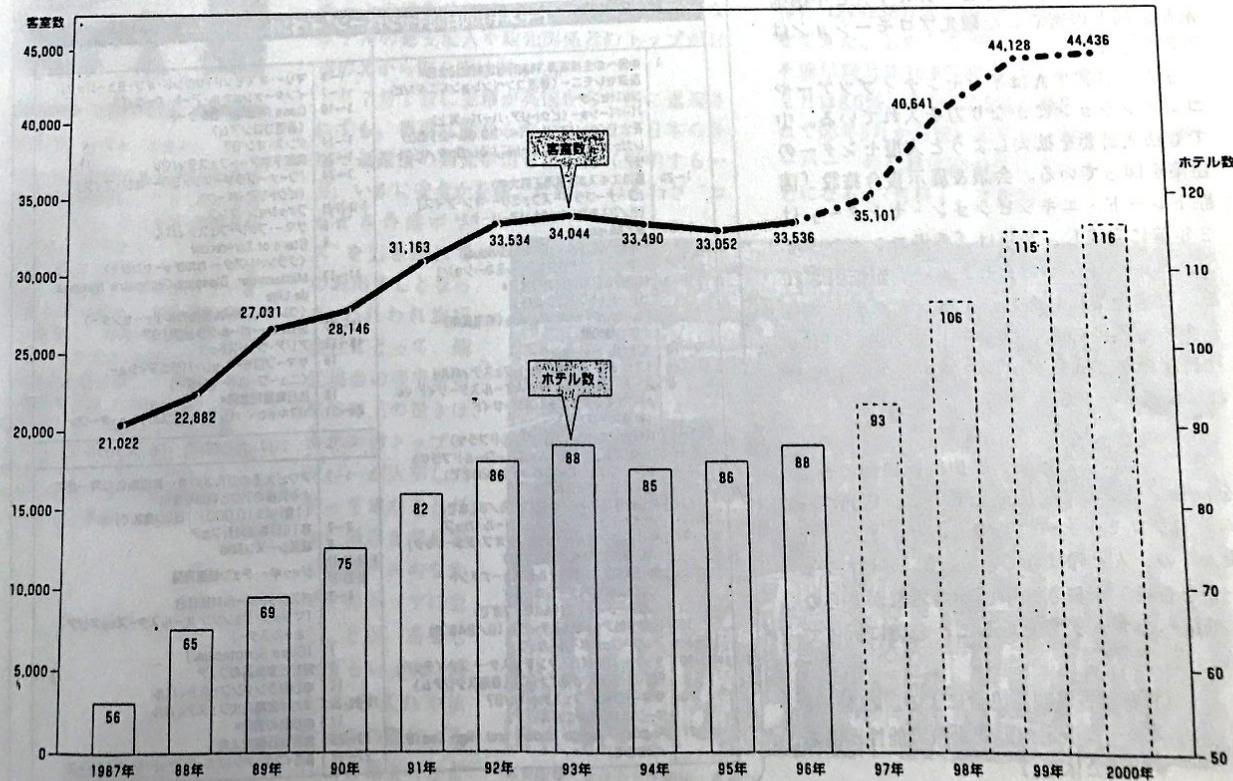
他方、好材料も多い。まずは新国際空港。98年4月に開港が予定されているチェック・ラブ・コク空港である。増大する航空需要に対応するために、現在の啓徳空港に取って代わる。香港島の西に位置するランタオ島西岸の埋立地に建設されている海上空港で、総面積は1248ヘクタール、現在の啓徳空港の4倍の広さだ。3800mの滑走路2本(開港時は1本)を持ち、24時間の離着陸が可能。開港時から年間3500万人の旅客を取り扱う能力を持つ。

アクセス面も万全で、香港市内(セントラル地区)と空港を約20分で結ぶ空港鉄道(地下鉄/全長34km)が新設される。

次にホテル建築に関するニュース。ここ数年の香港のホテル状況をみてみると、88年以来、香港島にはトップクラスのホテル建設が相次いだが、一時期(94年)、オフィス需要の高まりで投資効率の良いオフィス・ビルディングにチェンジ。しかし、再度、増加傾向を見せており、昨今である。

新空港がオープンする98年にはホテルの増

■過去10年間の香港のホテル数および客室数の推移と2000年までの予定数(資料5)



加が加速される勘定になる。ちなみに供給量は、96年には88ホテル・3万3536室であったものが、98年には106ホテル・4万641室へ、さらに2000年には116ホテル・4万4436室となる予定で、96年との比較で1万室以上が増える計算となる。(資料5参照)

また、新空港内にもエアポートホテル(香港最大の1200室／開港時600室で開業)がオープンする予定となっている。

したがって、2000年には世界一のホテル激戦都市になることは疑いない。ホテル間の競争激化はサービスアップへ繋がり、また、適正レートをもたらすことになるため、大歓迎である。

3番目として、「観光開発への熱意」があげられる。香港・マカオ・中国政府、いわゆる“仲良しトリオ”的観光開発合作第1号である、「珠江デルタ」プロジェクトは、2年ほど前に打ち上げられて現在進行中のもの。香港をゲートウェイとして、中国南部(広東省)とマカオを周遊して、3つの地区的魅力を引き出そうとする構想である。このプロジェクトに沿って、いろいろなツアー・パンフレットが旅行社のスタンドに並んでいる。

最近では航空会社の都合で、ゲートウェイを広州にしたり、マカオにしたりするコースもできている。近い将来、香港と中国の北京、上海、西安などを結んだ“ビッグ・トライアングル”もボビュラーコースとして登場してくれるであろう。となると、H K T Aと中国国家旅游局との密着した観光プロモーションは不可欠となる。

また、H K T Aはインセンティブツアーやコンベンションにかなり力を入れている。中でも法人需要を拡大しようと大型センターの建築を図っている。会議&展示複合施設「国際トレード・エキシビション・センター」は2年前に完成し、今年は「香港コンベンション・エキシビション・センター」が拡張される。日本企業に対応したイベントやテーマパーティも香港の地にマッチしている。特に、社員旅行などは日本からのアクセスを考慮すれば最適といえる。

さて、私はここ数年、歴史的転換期の香港を毎日、見つめて生活をしている。観光ブームの“プロモーター役”でもあり、また“仕掛人”的一人と呼ばれている。“レッセ・フェールな香港”が続き、中国への返還がさらなる飛躍へのステップであることを切に祈っている。

(資料は香港観光協会による。右記カレンダーは予定で、変更の可能性がある。
*印は公休日。)

イベントが目白押し 「トキメキ100日間」キャンペーン



返還を前に旅行ブームに沸く香港。この熱気が返還後も続くのか、その行方を戦々恐々と見守りながら、あの手この手で香港を売り込む業界。本文でも述べたが、香港観光協会が展開する「トキメキ100日間」キャンペーンがその代表。7月1日から10月8日までの間に100日間の期間中、多彩なイベントが開催され、香港はお祭り気分一色に包まれる。また、期間中のツアー参加者全員に、返還後100日間に香港を訪れたことを証明する「来港証明書」を発行するほか、100香港ドルのショッピング券や割引きクーポンなどの特典も用意している。

新時代の幕開けを彩る主なイベントを簡単に紹介しよう。

- マリー・オズモンド「サウンド・オブ・ミュージック」
- 愛され続けてきたミュージカルを上演。
- 「ワーナー・ブラザーズ ファミリー・オン・アイス」
- おなじみのキャラクターが登場してファンタジックなショーを展開。制作に2年を要した力作で、大人も夢中になりそうだ。

■「アジア・ウッドストック」コンサート 各国から人気のポップスターが揃って繰り広げる歌の祭典。

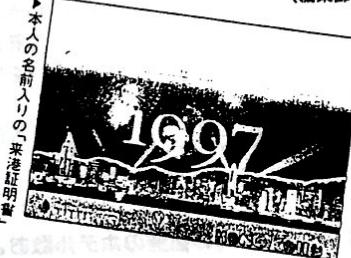
- ジャッキー・チエン映画月間 香港映画界のスーパースターが思う存分楽しめる。
- この他、名門チームによるサッカー対抗

試合やNBAオールスターとアジアオールスターによるドリーム・マッチなどのスポーツ・イベント等、各種フェスティバルが目白押しした。

期間中のイベントは下記カレンダーのとおり。また100日間を通して続くイベントとして次の4つがある。

- タウンガス・フード・フェスタ 始められたレストランでスペシャル・メニューを披露する食の祭典。
- シティ・オブ・ライツ ピクトリア・ハーバーを囲むビル群や街のすべての公園が美しくライトアップされる。
- ハーバーフロント・フェスティバル ピクトリア・ハーバー沿いで野外イベントが繰り広げられる。
- ランカイフォン・パーティ・ウィークエンド 今ホットなナイトエリア「ランカイフォン」で週末がさらに熱くなる。

(編集部)



「トキメキ100日間」イベントカレンダー

日付	イベント
1	中国への主催返還・特別行政区制定記念日* 返還セレモニー(香港コンベンション&エキシビションセンター) ハーバーショー(ピクトリア・ハーバー海上) 花火(ピクトリア・ハーバー/20:00~21:00) レガッタ(100隻のボートによるレガッタ/ピクトリア・ハーバー)
1~20	香港エキスポ(香港芸術大学) 「ワーナー・ブラザーズ・ファミリー・オン・アイス」 (8/31まで)(ピクトリア・ハーバー)
1~31	97 Museum: History,Community&Individual 「ゴルデン・ドラゴン・イルミネーション」 特別行政区制定記念日翌日* パレード(セントラル地区) Fabulous Floats Parade(香港島側) 中国古地図展
2~10	香港カルチャーセンター 「ミニ・ミュージック・アートフェスティバル」 オールスター・サッカー・FIFAオールスター・サイド vs AFCエイジアン・オールスター・サイド (香港スタジアム)
3~7	祝賀カーニバル(ニューワールドプラザ) ツーリズム・カーニバル(ニューワールドプラザ) スマーフン・カーニバル(8/28まで)
8	ミス香港コンテスト
13	第8回香港フード・エキスポ(8/31まで)
14	アジア・パシフィック・フットボール・カップ マリー・オズモンド「サウンド・オブ・ミュージック」
15~31	スマーフン・カーニバル(8/3まで)(香港海洋学院) 第1回国際ハンドボール招待トーナメント (九龍公園屋内ゲームホール)
17	国際アート・カーニバル(8/7まで)
19	国際子供アートフェスティバル(8/24まで)
19~31	アジア・フットボール・カップ サッカー対抗試合「マンチスター・ユナイテッドFC vs サウス・チャイナFC」(香港スタジアム) スマーフン・フェスティバル'97 オープニングカーニバル
20	August Fashion Shows and High Tea(B/28まで)
21	1~7 アジア大王のグルメの宴-萬福飯店の阿一氏による究極のアワビ料理を提供 (1食HK\$10,000/1日20食まで) 第16回香港時計フェア 競馬シーズン開始 ジャッキー・チエン映画月間
3~7	8~17 パン・アーティスト・アートフェスティバル 「マジック・ジョンソン オールスターvsアジア・オールスター」 Glare Spectacular
6~7	18~27 時計と宝飾品のフェア 中秋節ランタンフェスティバル マカオ国際花火フェスティバル 中秋節の翌日
6~10・13~17	23~25 世界銀行国際大会 香港インターナショナル・クリケット・シックスティーズ
20~23~27	27~28
6~7	
7	
7	
16	
16~20~27	
17	
23~25	
27~28	